

Mr. Bassman (ベースマン列伝) vol.56

ジャズにおいてベース弾きとは、縁の下の力持ち、水先案内人といったやや日陰の存在。おまけに、ウッドベースなら持ち運びも大変……。だが、黙々とベースをウォーキングさせ、バンドをスイングさせることに魂を注ぐベースマンが、一度化けの皮を剥くとももの凄い名演・名盤が生まれるのだ。このコーナーでは、そんなジャズ・ベースマンの偉業を称えるとともに、ジャズ・ベースの素晴らしさを伝えていきたい。

Ike Isaacs【アイク・アイザクス】



Photo from "At Pied Piper/Ike Isaacs (GMP)

Profile

1923年3月28日、米国オハイオ州アクロン生まれ。本名はCharles "Ike" Isaacs。幼少期はトランペットとチューバを演奏。41年ベースに転向。第2次世界大戦中に軍隊で演奏活動を行い、ベースをウェンデル・マーシャルに師事。48年から50年までタイニー・グラ임ス、51年から53年までアル・ボスティック、53年ポール・クイニシェット、56年ベニー・グリーンと共演を果たす。56年に地元オハイオ州で“フォー・マエストロ”を率い、その後カーメン・マクレエ、のトリオで2年間活動。50年代後半にカーメン・マクレエと結婚（その後、離婚）。57年にはレイ・ブライアントの『レイ・ブライアント・トリオ』、翌58年にはベニー・グリーンとの『ソウル・スターリン』のレコーディングに参加。その後、ランバート、ヘンドリックス&ロスで活動後、62年カウント・ベイシー、62年から64年までグロリア・リン、66年から70年までエロール・ガーナーと共演。自身の小編成バンドでも活動を行う。67年にRGBで生涯唯一のリーダー・アルバム『アット・パイドパイパー』をジャック・ウィルソンとジミー・スミスとレコーディング。プロデュースはチャールス・ミンガスの師であるレット・カレンターが担当。70年代以降の活動や晩年の活動はあまり知られていない。1981年2月27日死去。享年57歳。

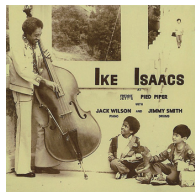
太くファンキーなウォーキングで魅了した職人肌のベースマン

地べたに座る2人の子供に優しい笑顔を見せながらベースを弾く姿を捉えたジャケットが印象的な唯一のリーダー作品『アット・パイドパイパー』。このアイクの傑作だが、真のリーダーはジャック・ウィルソン(p)だったとされ、ジャック・ウィルソン・トリオ名義でアルバムがリリースされた経緯もあるが、いづれにしても、このライヴ盤におけるベースプレイは最高。テーマ曲『ソウリン』のベースソロで聴かせるご機嫌なウォーキングは素晴らしく、ソロであってもウォーキングを貫くあたりは本誌由来のベースマン＝リロイ・ウィネガーを彷彿とさせる。

また、あまり知られていないが、アイクはカーメン・マクレエの2番目の夫でもあった。カーメンのトリオでの活動が縁で結ばれたが、カーメンの最初の夫は名ジャズ・ドラマーのケニー・クラークだった。ケニーとは12年程、アイクとは2年程の結婚生活を経て離婚している。

II's Great Albums

残されたリーダー・アルバムは『アット・パイドパイパー』1枚のみで、サイドマンとして参加したアルバムも多くはないが、その力強いウォーキング・ベースは忘れがたい。



アット・パイドパイパー アイク・アイザクス・トリオ (GMP : GCD-003)

1967年米国ロサンゼルスのパイドパイパーで録音されたアイクの生涯唯一のトリオによるリーダー作。スイングなライヴ盤の傑作。全7曲収録。



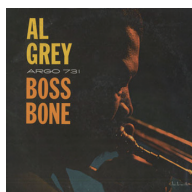
カーメン・マクレエ (FSRCD-670) [Import CD]

アイクの元妻でもあるカーメン・マクレエが1957~58年にかけてレコーディングした2枚のアルバムのカプリング作品。アイクがベースで参加。



ハイ・フライング ランバート、ヘンドリックス&ロス (CL-1675) [Import LP]

人気ヴォーカル・トリオのランバート、ヘンドリックス&ロスが1962年にアイク率いるトリオと一緒にレコーディングしたアルバム。全11曲収録。



ボス・ボーン アル・グレイ (Argo : LP-731) [Import LP]

カウント・ベイシー楽団で活躍した名トロンボーン奏者アル・グレイの1963年発売のワンホーンアルバム。アイクがベースで参加。全9曲収録。